

「ゲーム依存」が病気と認定

伊丹市立総合教育センター
所長 太田 洋子

6月19日の朝刊にこんな見出しが大きく掲載されました。「WHO（世界保健機構）、ゲーム依存症を「疾患」認定へ 予防や治療が必要」

私たち学校現場にいる者にとって、これまでも、「スマホのやりすぎで、朝、起きることができない」「学校に行けなくなった」「オンラインゲームにはまり、親がそれを取り上げようとすると暴れる」といった事例をよく目にしてきました。その時に、「これは一種の病気じゃないの」と思ったものです。でも、それはあくまでも経験に基づくものでした。今回、世界保健機構（WHO）が、国際疾病分類を改訂し、その中で、オンラインゲームなどに没頭し、生活や健康に支障が出る「ゲーム障害（ゲーム依存症）」を精神疾患と位置づけたというのです。その内容を見てみますと次のようになっています。



〈ゲーム障害（ゲーム依存症）〉

- ① ゲームの時間や頻度をコントロールできない。
- ② 日常生活でゲームを最優先する。
- ③ ゲーム以外の出来事や関心事の優先度が低くなる。
- ④ こうした行動が12ヶ月以上続く

等の諸条件があてはまると、「ゲーム障害（ゲーム依存症）」と診断される可能性がある。

厚生労働省の推計によると、日本国内の中高生のネット依存者数は52万と報告されており、その大半はゲーム依存ではないかと言われています。

今年の春、ある保護者から「子どもたちが荒野行動にはまっていて危険だと思います」という相談を受けました。「荒野行動」を調べてみると、スマホのゲームで、オンライン上で集められた100人が無人島に降り立ち、最後の1人になるまで戦い続けるゲームです。1人でも戦えますが、2人から5人のチームで戦うルールもあり、一度はまると大人でもなかなか抜け出せないそうです。ゲームそのものは無料ですが、武器に課金がされる等、精神面でも金銭面でも危険は多そうです。これからの時代、大人も子どもも誘惑に負けず自分を制する強い心を持つことが必要です。

家庭で、スマホを子どもたちに渡すときに、どうされているでしょうか？フィルタリングをしないで、または使い方の家庭での約束を決めずに渡していないでしょうか？学校では、子どもたちにネット社会に潜む罠について、しっかり教えているでしょうか。夏休み明けの今こそ、生活習慣全般を含め、このことを考えておかないといけません。何事も最初が肝心です。それを怠っていると、あとで、病気と診断され、治療をしないといけなくなるときが来るかもしれません。その時に、後悔しても遅いのです。

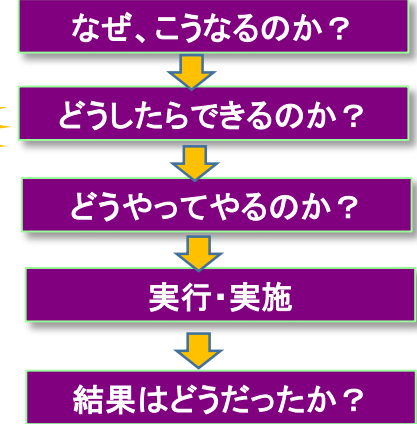
プログラミング教育の導入に向けて



プログラミング的思考とは
 自分がしたい活動を実現するために、どのような動きが必要で、どのように組み合わせたら良いのか、**論理的に考えていく力**

プログラミング教育とは、コンピュータに意図した処理を行うように指示することができることを体験させながら、将来どのような職業に就くとしても、時代を超えて普遍的に求められる力としての、「**プログラミング的思考**」を**育む**ことであり、コーディング(コンピュータでプログラムを作成すること)を覚えることが目的ではありません。

これからの社会で求められる力



論理的思考とは

目的達成のため、物事の筋道を考え、計画的に実行する力。課題を意識し、より良くするための手順を考える思考。(無意識を意識化)

必ずやるべきものから実行していきましょう!!

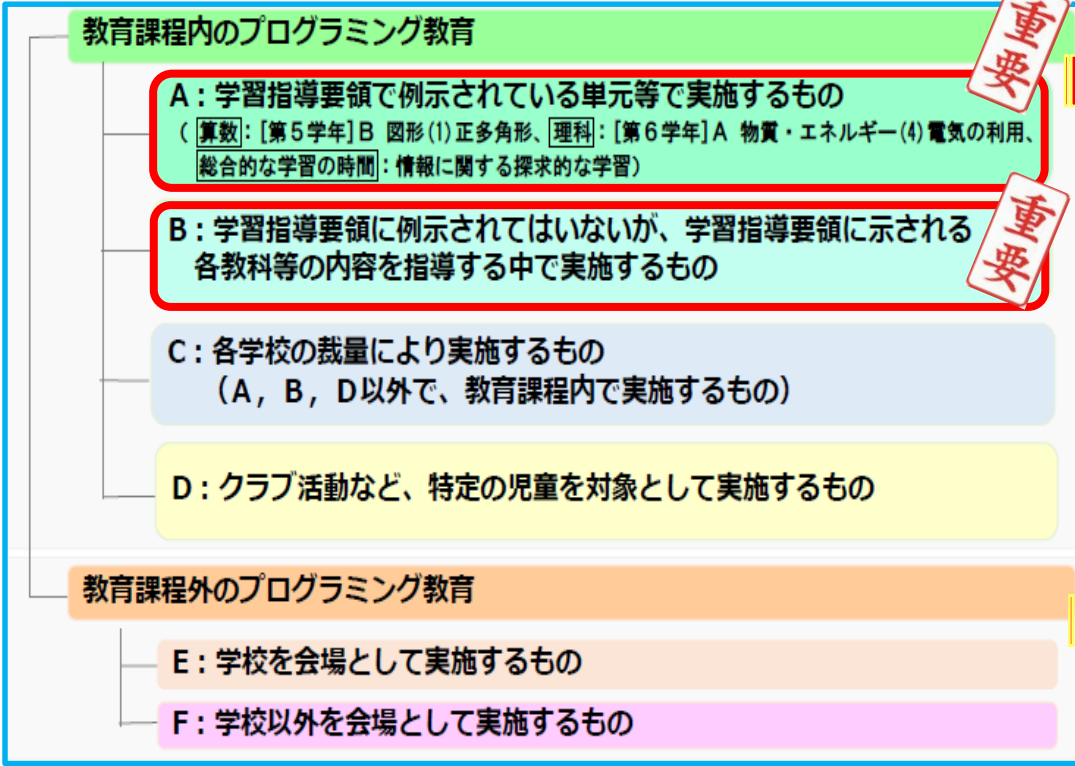
重要



プログラムの構造を支える要素 (どのような思考を扱えば良いのか)

- ・**順次**... ひとつひとつを手順として捉え実行すること
- ・**分岐**... 状況によって、次の行動を変えること
- ・**反復**... 目標が達成されるまで、同じ動作を続けること

小学校段階のプログラミングに関する学習活動の分類 (例)



STEP1 A項目から

- ① プログラミングを通して正多角形の意味を基に正多角形を書く(算数5年)
- ② 身の回りには電気の性質や働きを利用した道具があること等をプログラミングを通して学習する(理科6年)
- ③ 「情報」に関する探求的な学習(総合的な学習の時間)

STEP2 B項目の開発がポイント

- ・ 様々なリズム、パターンを組み合わせさせて音楽を作ることをプログラミングを通して学習する
- ・ 調理実習の手順を考える
- ・ 体育の実技

プログラミング教育は、学習指導要領に例示されている単元等に限定することなく、**多様な教科・学年・単元等において実施**されることが望まれています。プログラミングに関する学習活動が上記のとおり分類・整理されています。

文部科学省情報教育課作成資料より

夏

季

研

修

報

告

夏季休業中に総合教育センターで実施した研修・講座の中から3つについて内容等を紹介します。

「授業力向上講座②」(東京大学教授 市川 伸一 氏)
テーマ「習得における主体的・対話的で深い学び
～教えて考えさせる授業を通して～」

内 容

- 「教えて考えさせる授業」とは
- 授業づくりのポイント
- 習得のALとしてのOKJ

受講者からの声

- 学んだことを生かし、教えるべき場面と考えさせる場面をしっかりとつかみ、子ども達が本当に「わかった」といえる授業づくりをしていきたい。
- 予習の段階を踏むことで、理解が困難な子への理解の手助けになると強く感じた。新たな視点を実感できた。



「保護者と教師のための講演会」(元大阪市立大空小学校長 木村 泰子 氏)
テーマ「みんながつくる みんなの学校
ーすべての子どもが安心して学び合える地域の学校をー」

内 容

- 大空小学校について
- チーム学校の作り方
- 保護者ではなくサポーターとしての役割
- 困っている子どもを探す
- 地域の学校とは、子どもが学ぶ場である
- 大人が学ぶ姿勢を見せると子どもが育つ
- 子どもたちへ伝える約束「自分がされていやなことはしない」
- ビデオ鑑賞
- まとめ

受講者からの声

- 大空小学校では、人が生きていく中で一番大切な「人を受け入れ、認める」ことを学校全体、地域全体で取り組まれていることにとても共感を持てた。
- みんなの学校をつくるためには、子どものことだけでなく、そこに携わる教師(大人)同士のつながりがいかに重要であるかがわかった。



「ライフスキル教育講座」(神戸大学名誉教授・伊丹市教育委員 川畑 徹朗 氏)
テーマ「子どものレジリエンシー(しなやかに生きる心の能力)を育てる」

内 容

- セルフエスティームについて
- 薬物依存とセルフエスティームの関係について
- 薬物依存からの復帰におけるセルフエスティームの重要性について
- レジリエンシーについて
- レジリエンシーの高い子どもを育てるために

受講者からの声

- スキルを身につければ、ストレスに対応できるのだと学んだ。職場や家庭で実践できるわかりやすい内容であった。
- 子ども自身が、セルフエスティームを身につけられるような関わり方をしていきたいと思う。教師として自分自身の自尊心も身につけていきたい。



発行 伊丹市立総合教育センター

月～金 9:00～21:00 所在地 〒664-0898 伊丹市千僧1丁目1番 TEL 072-780-2480 FAX 072-780-2482
 土 9:00～17:00

休館日 日曜・祝日・年末・年始 総合教育センターHP <http://www.itami.ed.jp/>